シンガポール、マレーシア、日本の青少年文化交流事業

2014 年８月 22 日（金）－ ９月１日（月）

レポート

仲良し６人組

企画・運営：Little Creators

助成：JAPANFOUNDATION 国際交流基金

事業の目的

『シンガポール、マレーシア、日本の青少年文化交流事業』は一事業であると同時に、アジアにおける子どものネットワーク作りという大きな活動の一環でもある。従って、この事業だけで完結するのではなく、アジアという範囲で前の事業を引き継ぎながら次の事業へ続けていくことに力を入れている。

各国の「チャイルド・エイド」コンサートを中心に、青少年が国境や言葉を越えて音楽や他の芸術の力をかりコミュニケーションをとり、お互いの文化を知り、知性・教養の観点からその視野を拡げる。また、コンサートは交流の結果で、コンサートの開催自体よりも、様々な環境の青少年が１つの目標にむかって協力することに重きをおいている。

加えて、各国のコンサートの収益はその国の恵まれない子どものために使われる。子どもであっても他の子どものために役立つことを知り、また役立つように心がけるべきであることを伝えることも大切な目的の１つである。

＊ シンガポールでは、青少年の文化施設 10 スクエアのオープンに際し、そこを会場として使うはずであったが、工事の遅れからリトル・アーツ・アカデミーを使用。どちらも RICE 社が運営する文化施設で、10 スクエアがオープンしたおりには、青年層が 10 スクエアを少年少女層がリトル・アーツ・アカデミーを基地として芸術文化体験を行う事になっている。尚、これらの施設では、音楽、ダンス、美術、演劇などの授業を貧困層の青少年が無償で受ける事ができる。

＊ マレーシアでは「チャイルド・エイド・アジア@KL」の開催に際して、ワークショップやリハーサルを通してマレーシア、シンガポール、インドネシアの参加者と交流を行う。また、今回のコンサートでは特にマレーシアへの難民の子どもたちへの経済的支援、文化交流支援を行う。

事業参加者

矢口桃子	ヴォーカリスト。「チャイルド・エイド・アジア 2014」出演者。14 歳。
中島麗	尺八奏者。「チャイルド・エイド・アジア 2014」出演者。18 歳。
北村明日人	ピアニスト。「チャイルド・エイド・アジア 2014」出演者。17 歳。
長谷川仰子	NPO リトル・クリエイターズ理事。通訳。コーディネーター。

シンガポールの青少年

マレーシアの青少年

インドネシアの青少年

事業内容

8月22日

矢口は名古屋から、中島、北村は東京からシンガポールへ向かい、到着と同時にホスト・ファミリーのお宅へ移動。
ホスト・ファミリーとして迎えてくれたのは、「チャイルド・エイド・アジア2014」(2014年1月11日開催　於：サントリーホール　主催：NPOリトル・クリエイターズ）の参加者でオン・イー・ティンさん（フルート）のご家族（矢口滞在)、コレイ・コー君（ボーカル）のご家族（中島滞在)、パン・レイ・ユーさん（ピアノ）のご家族（北村滞在）であった。

8月23日

朝食をホスト・ファミリー宅で取った後、リトル・アーツ・アカデミーに集合。リトル・アーツ・アカデミー内を見学してから、昼食。午後、交流会を行う。

交流会では青年層のメンバー30 人が迎えてくれた。まず最初にリトル・アーツ・アカデミーの青年層がどのように活動しているかを説明。自治の形になっていて、各セクション（音楽、絵画など）にリーダーがおり、その上に議長がいることを聞き、日本人参加者は大人に指示を受けているばかりでない事に驚いた様子だった。その後自己紹介が始まり、何故それぞれがアートを身につけようとしているのか、何が切っ掛けて始めたのかなどを説明。質疑応答も行われ、お互いの国の事情に興味を示していた。通訳が入ったものの、日本人参加者もできる限り英語で話そうと努力をしていた。

歌いながら踊るというクラスに参加。始めはなかなかとけ込めない様子だったが、円になって、1音を口ずさみながら他の参加者にタッチし、タッチされた参加者は違う音を口ずさみながらまた別の参加者にタッチするというゲーム感覚のトレーニングに参加した後は、急激に距離が縮まったようだった。

お礼の意味を込めて、ダンス・スタジオでミニコンサートを行った。観客は60名ほど。「富士山とふるさとのメドレー」、「琥珀の道」「君をのせて」「輝く明日へ」の 4 曲を披露。アンコールを求められるほど盛況であった。予定には無かったが、お返しに、と歌いながら踊

るクラスの青少年が１曲披露、続いてマレーシアの「チャイルド・エイド・アジア@KL」に参加予定のルミナスというグループが１曲披露してくれた。記念に写真を何枚もとって、別れがたいほどの瞬間となった。

夜は日本食レストラン「しま」でミニチャリティーコンサート。上述と同じ４曲を浴衣を着て披露した。これは、恵まれない子どもの為に自分たちの才能を使おうとマレーシアに行く日本の子どもたちがいることを知り、日本の恵まれない子どもたちのために寄付をするからレストランで演奏をというリクエストに参加者が応えて実現した。レストランでの演奏は初めての参加者もいて戸惑うかと思ったが、箸をとめて立ち上がって聞いて下さったお客様が多く、参加者ものびのびと気持ちよく演奏を行った。また、ホスト・ファミリーのなかにも聞きにきて下さる方がいて、ちょっとしたお礼の会にもなった。

８月 24 日

一日ホスト・ファミリーと過ごす、と予定していた日であったが、全てのホスト・ファミリーが一緒に計画をして参加者や子どもたちをユニバーサル・スタジオに招待、「チャイルド・エイド・アジア 2014」のリユニオンになった。ホスト・ファミリーの子どもたち以外には、ディエニッシュ君（司会）、ジョナサン君（ピアノ）、ルック君（ピアノ）ら「チャイルド・エイド・アジア 2014」出演者も参加、夜はコレイ君のお誕生日会もかねてのお食事会で思いっきり楽しい一日を過ごした。とはいえ、シンガポールの男子は徴兵される事や、音楽を勉強しているからといって将来音楽家になるつもりがある子どもが少ないことも知り、楽しいばかりではなく考えるヒントも得られたようだ。

８月 25 日

午前中はヤング・スー・トー・コンサーバトリーを見学。シンガポール国立大学内にある音楽学校で、日本人留学生の佐々木智佳子さん、瀬川直人さんから学校の案内や留学体験の事など色々とお

話を伺った。学費が外国人であってもほぼ無料であると知り、驚いた様子だった。最後には学内で行われていたコンサートも見学、将来シンガポールへの大学留学も少しばかり考えた様子だった。

午後は、「チャイルド・エイド・アジア@KL」のリハーサルをシンガポールの参加者と行う。特に「Sukiyaki（上を向いて歩こう）」「Summer Time」は「チャイルド・エイド・アジア 2014」出演者のアナーニャさん（ヴォーカル）とのコラボレーションなので、何度もお互いの呼吸が合うまで練習を続けた。

そしてホスト・ファミリーと最後の夜。各家庭でそれぞれおもてなしを受け、最後のひとときを惜しんだ。

8月26日

11：30に空港で集合し、13：30の飛行機でマレーシア、クアラルンプールへ。風景がシンガポールと全く違う事に驚きながら、また治安の悪さや交通事情の悪さに少し緊張したようすだった。たまっていた洗濯を出しにいきつつ、歓迎夕食会。中島の母と姉も日本から駆けつけてくれ、コンサートに向けて気持ちを切り替えた。

8月27日

主催者側が午前中に観光の予定を立てていてくれたが、参加者に疲れの色が見えていたのでホテルで休養する事に。午後からはバトー洞窟でヒンズー教のお寺を拝観。なじみの無い宗教を地元の人に説明してもらいながら、約300段の階段を上った。

その後、ついにコンサート会場 KLPAC を視察。仕込み中のところ、楽屋や動線の説明を受け、ピアノの確認をする。夕方にはインドネシアのクラリッサ・タマラさん（エレクトリッ

ク・バイオリン）とマレーシアのゴー・ウィン・チー君（チェロ）が合流。ウィン・チー君とは中島と北村が「チャイルド・エイド・アジア 2014」で共演していたこともあり、すぐに５人とも仲良くなった。

8 月 28 日

朝から 1 日リハーサル。久々に共演をした中島、北村、ウィン・チー君の「百花撩乱」は「チャイルド・エイド・アジア 2014」の時より、ずっとのっている感じに。「Sukiyaki（上を向いて歩こう）」「Take Five」「Summer Time」などコラボレーションの曲は特に熱心に練習をした。また全員で合唱をする予定の「The World to Imagine」と日本のチャイルド・エイド・アジアのテーマ曲「Bridge across the Sea」も出演者でピート・チャーチル講師の伴奏で練習。日本語の部分は日本人が引っ張らなければと、頑張っていた。

8 月 29 日

朝、昼とピート・チャーチル講師の歌のワークショップに参加。英語の歌を楽譜や歌詞カードもなしに３曲合唱するようにするワークショップ。赤ん坊が言葉を覚えるように、意味ではなく、まずは音を伝える事から始めるという作り方のワークショップで、地元の難民の子どもたち約 40 人とその他の子ども約 30 人とともに参加した。最初の１曲は歌詞が少なく、曲も長くないので通訳がなくても無理なくついていけた様子だったが、2 曲目、3 曲目となるにつれ、舌が英語についていかなかったようである。ただし、曲の作り方、合唱の作り方については、今まで参加者が習ってきたものと全く違っていたため、興味深く参加していた。また、難民という日本ではあまりなじみの無い社会問題を突きつけられ、戸惑いながらも、世界の在り方に思いを寄せているようだった。

夜は、第一回目のコンサート。シンガポールの歌姫アナーニャさんの病気による降板で、突如「Summer Time」を矢口と中島が歌う事になったが、かえって思い切りできたのかすこぶる評判の良いものとなった。尺八、ピアノ、チェロ、バイオリン、ギターで共演する「Take Five」については、観客からは大きな拍手を貰ったが、共演者が

100%満足しきれず翌日翌々日と稽古を重ね、また構成も変えて、毎日作りながら発表するようになった。元々北村が編曲したものを土台としていたが、少しばかり大人の力を借りて各楽器のソロ部分を増やすこととした。

矢口の家族もこの日、KL 入りをした。

8 月 30 日

午後は、リハーサル、特に「Take Five」の作り込みをしたいという共演者たちの意向で、ピート講師のワークショップには参加せずリハーサルに専念した。

ランチタイムには現地のジャズバンドによるミニコンサートを観覧。ジャズの魅力を感じさせるひとときだった。

夜のガラ・コンサートでは全員が力を出し切り、前日よりもまた成長した舞台を見せた。「Take Five」に関しては、各楽器のソロ部分をもっと充実させたいと翌日への意欲を見せた。

8 月 31 日

朝、劇場に入るなり、それぞれ自分の稽古に励んだ。過去 2 日は皆楽しさが先に立っていたようだが、この日はそれぞれ自分がしなければいけない事を見据えて、まず自分の稽古をし、コラボレーションの稽古をして本番に臨んだ。大人に言われたスケジュールに乗っかって動いていた子どもたちが、自分たちで時間と空間をしきって稽古をした姿に見守る者たちは成長を感じほっとした。

本番は言うまでもなく、3 回の公演のうち最高で、

「Take Five」は目玉となった。また矢口と中島の「Summer Time」も矢口が歌った「君を乗せて」も観客から高い評価を受けた。何と言っても圧巻だったのは、この日ワークショップを終えて、初めて難民の子どもたちとコンサートの最後に大合唱したことだ。ピート講師に習った３曲の後の「Bridge across the Sea」は歌詞の内容と難民の子どもたちの状況が重なって涙を誘った。

夜は、劇場と同じ敷地内のレストランで打ち上げ。夜がふけていくのが淋しそうな様子だった。

９月１日

飛行機での移動。帰国。

事業を終えて

効果

シンガポールでもマレーシアでも、2014 年１月に東京で共演した子どもたちと再度出会え、ホームステイやコンサートでその関係を深める事ができたのは、何物にも代えがたい宝であると考える。特にシンガポールでは、実際にシンガポールの子どもたちと生活を共にする事で、彼の地での日常生活の在り方、言葉の壁を乗り越えて助けようとしてくれる人々の対応、兵役や軍隊の存在を学び、英語の勉強や留学する事への意欲などが湧いたようだ。マレーシアでは、音楽をツールに切磋琢磨してお互いの力を磨き、最後には力を会わせて舞台でそれを発表できた事に非常に自信をつけた様子だった。そして難民という日本ではなじみの無い環境の子どもたちと時間を過ごす事で、現実をしるとともに皆同じ人間であることを肌で感じたようである。主催者としては子どもたちが大人になっていくという意味の成長よりも、一人の人としてますます他者を思いやり尊重できるようになった様子をみて嬉しく感じている。

課題

お国柄といえばそれまでであるが、シンガポールもマレーシアも予定の詳細がなかなか確定せず頭を抱える場面もあった。が、関係機関との信頼関係は今回の旅を通じて益々あつくなっていることはあきらかであるので、今後も子どもたちの為に影にいる大人同士が最高の環境を作れるようタックルを組んでいきたいと考えている。

参加者のアンケートから

— 交流会では少し緊張していて、思ったことを言えなかったので、もっと自信をもって話しかけるべきだと思いました。

— 世界には私たちのように普通に暮らし、楽器をできるという環境におかれていない子どもたちもいます。私はその子供たちのために少しでも役に立ちたいと思っています。

— レストランなどで演奏したのは初めてで、どのような雰囲気になるかは分からずに行ったが、シンガポールの人々は日本の曲や尺八に興味をもって、わざわざ席を立って聞いて下さる方もいた。・・・ただ、音の届き方などが全く分からず、もう少しリハーサルをして遠くでどう聞こえているのか調べる必要があった。

— リハーサルで曲を作っていくという感覚が新しく、とても刺激的だった。同じ曲を合わせる時は、相手が何を求めているか分かるので、通訳の方がいなくても大丈夫だった。

— 世界に視野を拡げると自分の想像以上の世界があるので、交流事業に参加し、もっとたくさんの世界を知り自分の演奏活動に活かし、またそれを世界の子どもたちにシェアしていきたい。

— 日本の子どもたちだけでなく、アジアの国々の子どもたちと一緒に演奏し喜びを分け合う事ができた。日本、マレーシアと 2 回のチャイルド・エイド・アジアコンサートに参加した自分には、アジアの子どもたちに音楽の楽しさを伝える責任がある。自分が音楽をやっている意義を再認識した旅行だった。

— （ピート先生のワークショップは）歌詞のプリントがなくて、いきなり覚えるのはすごく大変だったけど、ピート先生が音で覚えろと言ったのでそうしたら口もまわって歌いやすく気持ちよかったです。初めてだったので緊張したけど、ジャズは楽しんでリズムにのる事が大切とわかったのでよかったです。

— 海外のコンサートに出て歌ったのは初めてだったので、どういう反応なのかとか全然予想できなくて怖かったけど、皆、私たちを歓迎してくれたし、すっごく喜んでくれて自分まで幸せになることができた。あ～これがチャイルド・エイドが求めているものだとわかった。だから enjoy することはできたんじゃないかと思う。今回、歌は自分にはなくてはならないものだとわかったし、将来は、世界の色んな施設をまわりながら、たくさんの人を自分の歌で幸せにできる、そんな歌手になりたいと思った。